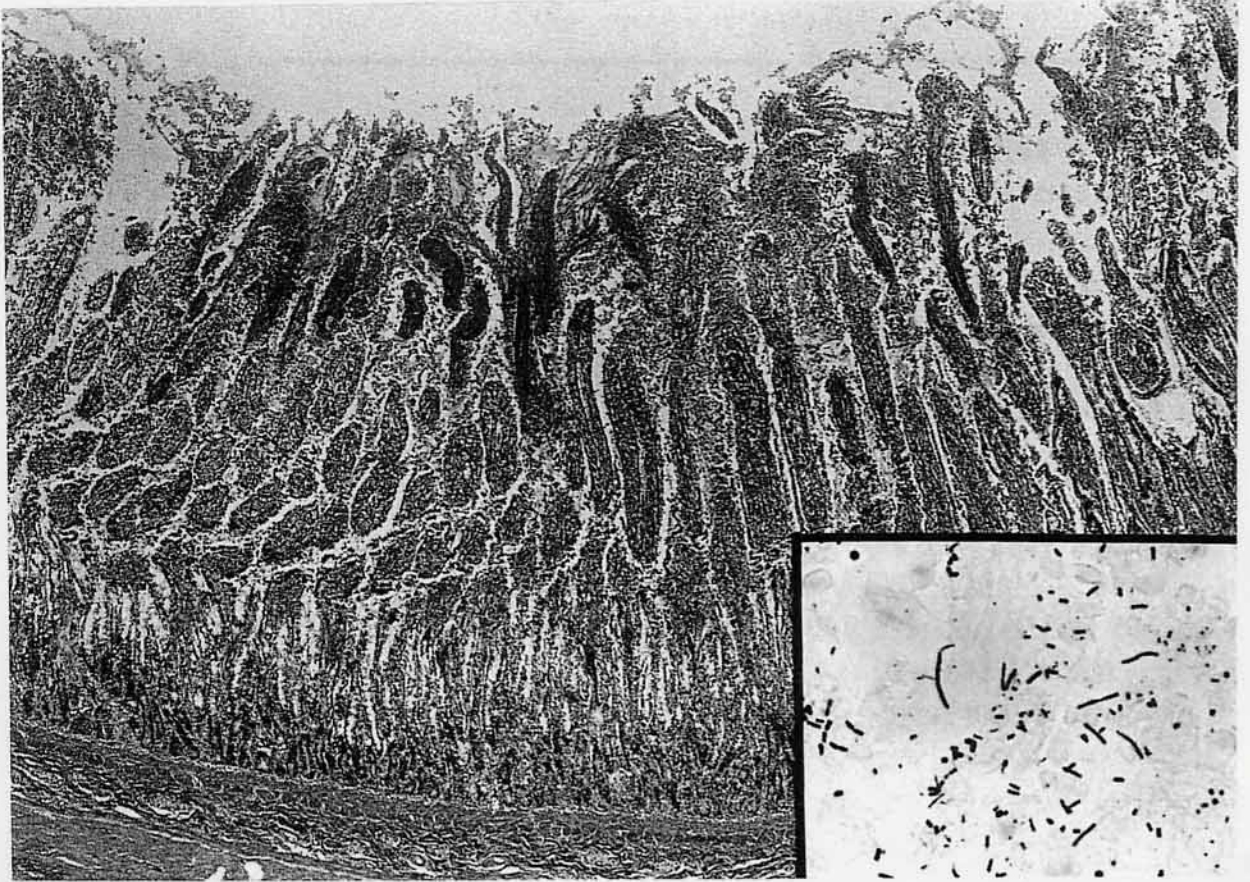


# 犬の小腸

岩手大学農学部家畜病理学教室 出題 第37回獣医病理学研修会標本No.704



**動物：**犬，シェットランドシープドッグ，雌，6歳。  
**臨床事項：**前日までは特に異状は認められなかったが、1996年4月24日早朝、突然嘔吐がみられ、某動物病院に来院。来院時は瀕死状態で肛門にはゼリー状の血便が付着していた。緊急処置として心マッサージと人工呼吸が施されたが同日午前9時頃死亡し、死後2時間で剖検が行われた。稟告によると、パルボウイルスワクチンは昨年度までは接種されていたとのことであった。  
**剖検所見：**1)十二指腸，空腸および回腸における出血性腸炎および漿膜面の出血。2)心肥大および両心室の拡張(円形心)。3)脾およびほぼ全身リンパ節の萎縮。4)腸間膜リンパ節における血液吸収。5)胸腺遺残。6)大腿骨赤色髄。7)過肥症。  
**組織学的所見：**病変は主に腸管に局限するもので、特に空回腸における腸絨毛上部の出血性壊死および粘膜上皮の剥離(写真，H E染色)が著しく、壊死に陥った粘膜上皮細胞領域には大桿菌が広範囲に認められ、グラム染色によってそれらはグラム陽性を呈していた(挿入図，Gram染色)。また、小腸陰窩周囲の粘膜固有層には軽度にリンパ球・形質細胞の浸

潤がみられたが、細胞構築は概ね保たれていた。  
**病原体検査：**空腸内容の嫌気性培養により、*Clostridium perfringens* (*C. perfringens*) が分離された。空腸乳剤を用いての培養細胞によるウイルス検査では有意なウイルスは分離されなかった。  
**考察：**本症例の病理組織学的な特徴は、腸粘膜における出血性壊死で、腸絨毛上部の壊死領域にはグラム陽性の桿菌が広範囲に認められ、*C. perfringens* が分離・同定されたことにより、「*C. perfringens*による出血性腸炎 (Prescott et al., Vet.Rec., 1978)」に一致するものと思われた。本症の病理学的な報告は少ないものの、突然の嘔吐および血様下痢に始まり、急性経過をたどり急死することが知られている。本症例の基礎的疾患は不明であったが、*C. perfringens* が産生する $\alpha$ 毒素による enterotoxemia の関与が考えられた。しかし、直接的な毒素の証明は行っていないことより研修会の討論では *C. perfringens* の役割、意義付けが議論された。  
**診断：***Clostridium perfringens* に起因した犬の出血性腸炎。